

# ストーリーテリングにおける子どもの物語体験の実際

——絵本の読み聞かせと比較して——

大 谷 朝

## 1 はじめに

ストーリーテリングは、19世紀末頃からアメリカの公共図書館で児童奉仕として行われてきた活動である。日本では、ストーリーテリングは、アメリカで図書館学を学んだ間崎ルリ子や松岡享子によって実践され、1960年代から図書館活動の中で広く行われてきた。一般に大人が子どもたちに物語を語り聞かせる活動である。現在、ストーリーテリングは、公共図書館や学校図書館といった図書館や文庫活動の中だけではなく、幼稚園や保育所、児童館などさまざまな場で広く行われている。それぞれの場で、対象や活動の状況も多様化しており、「素話」や「語り聞かせ」など他のさまざまな語る活動との呼称の混乱も生まれている。本研究では、ストーリーテリングを「訓練をつんだ語り手が、文学的な価値のある題材を自分のものとして、聞き手である子どもに、自然に語って聞かせる行為」と定義する。他の語る活動とは、目的・技法などに違いがみられるが、特に大きな相違は、語られる題材の文学性にある<sup>1)</sup>。ストーリーテリングは、図書館活動の中で行われてきた経緯からも、児童文学の中に題材を求めることが多い。語られる題材としての物語は、再話された昔話や作家による創作物語など幅広いジャンルから選ばれるが、どのジャンルの物語についても、文学として成立しているかどうかが重要視される。また、それらの物語は、ほぼ書かれたことばそのままに語られ、聞き手にとっては、文学を耳から聞く体験となっている。

このようなストーリーテリングの体験は、聞き手である子どもにとって他の語る活動の体験とは大きく異なる意義を持っていると考えられる。子どもにとって耳から聞く文学の体験がどのような意義を持っているかを探るため、まず本研究ではストーリーテリングを通して、子どもたちが実際にどのような物語体験を行っているのかを明らかにしたい。

## 2 調査の概要

### 2-1 調査の目的

現在、日本で子どもを対象として広く行われている物語を聞く体験としては、絵本の読み聞かせがある。絵本には絵があり、ゲームの要素をもつなど独自の媒体として文学の体験にとどまらないものも多いが、絵本を通して子どもが文学と出会い、それを楽しむ体験を行うことができ、ストーリーテリングと非常に近い活動となっている。また、ストーリーテリングも絵本の読み聞かせも、文字を習得していない幼い子どもたちにとって、自ら文学を読み進める読書への導入として行われることも多く、共通の目的をもって行われる活動となっている。

そこで、本研究では、ストーリーテリングにおける物語体験と、絵本の読み聞かせにおける物語体験を比較することによって、ストーリーテリングの物語体験の特徴を検討する。

本研究における物語体験とは、物語の展開を追いつ場面ごとの状況を理解することや登場人物の心情を把握することではなく、それぞれの活動の間に、子どもの心理的な体験としてどのようなことが起こっているのか、子どもがどのように物語と関わっているのかをさす。物語体験は、物語の内容理解・心情把握と相互に関わり合っている。物語体験は、ある程度内容理解や心情把握を行えなければならぬし、物語体験のあり方によって内容理解や心情把握の違いが生まれてくると考えられるからである。

ストーリーテリングでは、物語はことばのみによって表現される。そこで聞き手である子どもは、耳からのことばによって物語の展開を追いつ、それをイメージしていかなければならない。ただし、そのことばは、子どもの目前にいる大人が自分たちに向けて語ることばであり、そのことばの中には子どもが自分一人で読むだけでは感じられない感情も加わっている。そのよ

うなことばによって自らイメージを創っていくことが、ストーリーテリングにおける物語体験の基盤であり、その独自性を導き出していると考えられる。

絵本の読み聞かせでは、目の前の大人が自分たちに向けて読むこととともに、画家が物語を受けて描いた絵がある。耳からのことば以外に物語をイメージしていく視覚的な情報が存在しているのである。また、ごく幼い子どもたちにとっては、ことばのみで物語の内容を理解したり心情を把握したりすることは難しい場合もある。絵の存在の有無は、物語のイメージ化や物語の内容理解・登場人物の心情把握に違いをもたらすであろう。それによって絵本の読み聞かせにおける子どもの物語体験は、ストーリーテリングとは異なったものとなると考えられる。

その實際を明らかにするために、本研究ではそれぞれの活動を比較する調査を行い検討する。

## 2-2 調査の手続き

ある程度ことばのみによって物語の内容が理解できるようになり、ストーリーテリングを楽しむこともできるようになった、幼稚園の5歳児2クラスに、同じ語り手(読み手)が、同じ題材(『三びきのやぎのがらがらどん』)を用いて、それぞれストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、その活動時の子どもたちの様子、語り手の様子をビデオカメラ2台でそれぞれ記録した。さらに、活動後、かつてこの絵本を見たことがない子ども(各クラス3名ずつ)に、物語の内容にそって自分がイメージしたことについてのインタビュー調査を行い、それを通して各自の物語体験を探った。

## 2-3 調査の対象

神戸市内の幼稚園の5歳児2クラス(A組21名、B組22名 計43名)を対象として2007年2月に行った。調査時には43名中38名が6歳になっていた。

A組でストーリーテリング、B組で絵本の読み聞かせを行った。両クラスとも担任教諭が調査時まで『三びきのやぎのがらがらどん』を読み聞かせたことはなく、またストーリーテリングで行ったこともない。語り手(読み手)が調査以前に2度ずつ、各クラスでストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、クラス間で活動時の反応に大きな差がないことが確認された。語り手ともなじみ、ストーリーテリングや絵本の読み聞かせの活動にもなれた様子が見られた。

インタビューの対象児は、調査以前に『三びきのや

ぎのがらがらどん』を見たことがないと本人が申し出たものから担任教諭が選び、保護者に確認した。A組(ストーリーテリング)ではA1男児、A2女児、A3女児、B組(絵本の読み聞かせ)ではB1男児、B2男児、B3女児にインタビューを行った。

## 2-4 題材の分析

### 2-4-1 題材

題材として絵本『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン 瀬田貞二訳 福音館書店)を取り上げた。『三びきのやぎのがらがらどん』は、ノルウェーのペーター・アスピョルンセンとヨーレン・モーの二人によって1842年にスカンジナビアで採集された昔話を、アメリカの絵本作家であるマーシャ・ブラウンが絵本化したものである。マーシャ・ブラウンは、この絵本以外にも数々の昔話絵本を著し、その昔話が語り継がれてきた風土もふまえて絵本化することに長けていると評価されている<sup>2)</sup>。日本では1957年に瀬田貞二の訳によって出版されて以来版を重ね、読み継がれている。

『三びきのやぎのがらがらどん』は、そもそも昔話という、ことばだけで語り継がれ完成された物語をもとにしているため、ことばのみで物語を理解することができる。また、この本では、絵本化のために描写を変えたところは特に見られない。瀬田貞二の訳は、他の昔話集にある佐藤俊彦訳、大塚勇三訳の文章と比べて、リズムと響きと勢いがあり、文学としての表現の楽しみも大きい<sup>3)</sup>。そのため、絵本のことばをそのままストーリーテリングの題材として用いた。

### 2-4-2 題材の文学としての特徴—構造・主題・ことば—

「三びきのやぎのがらがらどん」は、ヤギたちを主人公とし、彼らが「やまのくさばでふとる」という目標達成に向けて冒険に出かけ、その障害となるトロルを3回の挑戦で乗り越え、目的を達成するという物語である。スミス、L・Hが児童文学の分析の観点として挙げる三点<sup>4)</sup>から、構造、主題、ことばの三点に分けて、その文学的特徴を検討する。

まず、構造であるが、「三びきのやぎのがらがらどん」は昔話であり、昔話に特徴的な構造を備えている。冒頭で登場人物・場面・目的の設定が行われ、危機への挑戦が3回繰り返され、危機と闘うクライマックスを迎え、目的を達成するという結末をもっており、昔話らしい明快で簡潔な展開をたどる。このような展開は、リ्यूティ、マックスが、文学の一形式と

して捉えた昔話の「筋の運び」<sup>5)</sup>の特性とも一致する。そのような昔話の作品の中でも、スミス、L・H は、この物語の効果的な繰り返しや、「簡潔さ、単純さ、力強さ」を高く評価し、この物語の構造を良い文学作品の持つ形を具えたものとしている<sup>6)</sup>。また、主人公が冒険に出かけていくという構造は、瀬田貞二が指摘する、幼い子どもが楽しむ文学としての構造<sup>7)</sup>を持っており、文学として子どもが体験できる物語であるといえよう。

次に、主題について検討する。「三びきのやぎのがらがらどん」において、ヤギたちは、トロルという北欧の想像上の生き物と闘うが、その奥には渡辺茂男が指摘するように「三びきのやぎ（自然の生命）とトロル（自然の脅威）に象徴された二つの観念の戦い」<sup>8)</sup>があり、小さな生命の機知による闘い、大きな生命の力強い闘いの根元的な理由となっている。つまり、自分を越える脅威の対象に打ち勝つことが、この昔話の主題となっている。このような主題は、児童文学を評価する中で、子どもの本能的な欲求を満たすものと考えられている<sup>9)</sup>。また、このトロルという現実には存在しない生き物、しかも観念的な背景を持つ生き物の存在が、この物語の大きな魅力であり、そのような登場人物と出会うことも文学の大きな意義の一つと考えられる。

ことばの特徴としては、独特の比喩で描写されること、効果的な擬音語が用いられることが挙げられる。例えば、トロルは、「ぐりぐりめだまはさらのよう、つきでたはなはひかきぼうのよう」と表現される。トロルは、日本の子どもにとってはなじみのない存在であり、比喩によることばの描写のみでイメージすることは難しいかもしれない。また、それぞれのヤギが橋を渡っていく場面では、「かたことかたこと」「がたんごとん、がたんごとん、がたんごとん、がたんごとん」と音の大きさ、繰り返しの回数にも変化がつけられ、それぞれのヤギの大きさをも表現されている。全体を通して、リズムの良い勢いのあることばで語られており、ことばの芸術としての文学の観点からも文学体験をなす作品として捉えることのできる物語であると考えられる。

#### 2-4-3 題材の絵本としての特徴

マーシャ・ブラウンが描いた『さんびきのやぎのがらがらどん』では、ヤギたちとトロルと背景である山が、コバルト・茶・黄・黒色を中心に、ペン・コンテ・クレヨンによって、勢いのある線で大胆に描かれている。全14画面で構成されているが、物語の構成を

意識した配分がなされており、昔話の構造をふまえ、物語の展開に即した画面構成となっている。また、この昔話の語られてきた北欧の風土もふまえて背景の山が描かれ、北欧の昔話の持つ力強さ、素朴さを失うことなく描かれている。瀬田貞二は、この『三びきのやぎのがらがらどん』をマーシャ・ブラウンの最高傑作の一つとし、北欧の昔話を「伝達し印象づける絵本」として高く評価している<sup>10)</sup>。昔話を絵本化することについては、松岡享子によって、その難しさが指摘されている<sup>11)</sup>が、この『三びきのやぎのがらがらどん』は成功例と考えられており、絵本として昔話を体験することができるものととらえられている。また渡辺茂男も、2,3歳児には絵本の方が物語として理解しやすく、それ以上の子どもにとっても、この絵が想像の手がかりを与えてくれると分析している<sup>12)</sup>。したがってこの絵本は、5歳児にとって昔話絵本としても優れた体験ができる作品であり、ストーリーテリングと比較して行うことで、その物語体験の差を検討することができると考えられる。

#### 2-4-4 文章のみの物語と絵本との違い

文章のみの物語と絵本では、「三びきのやぎのがらがらどん」の物語の展開を追っていき、内容を理解するという点では、5歳児にとって大きな違いはないと考えられる。文章のみの物語「三びきのやぎのがらがらどん」と絵本『三びきのやぎのがらがらどん』の最も大きな違いは、物語をイメージすることに関わる、登場人物と背景の描写の仕方にある。

まず、登場人物の描写について検討する。主人公であるヤギたちは、文章においては、大きさ以外、細かい描写がいっさいされていない。登場した時には「三びきのやぎがおりました」と説明され、ひとかたまりとして受け取られるような描写がされる。トロルと出会って始めて、一匹ずつが焦点化され、その大きさについて言及される。また、どのヤギの感情も会話によって表現されるのみである。一方、絵本では最初から大きさや年齢に違いのある三匹として描き出される。そして、その表情によって、文章では言及されない彼らの感情が表現されている。絵本におけるヤギたちは、文章のみの物語よりも、個性化されて描かれているのである。

また、非常に重要な登場人物であるトロルは、文章では「はしのしたには、きみのわるいおきなトロルがすんでいました。ぐりぐりめだまはさらのよう、つきでたはなはひかきぼうのようでした。」と描写されている。一方、絵本『三びきのやぎのがらがらどん』

では、背景として描かれる谷川の岩と同じような形態と色で表され、渡辺茂男が指摘した「自然の脅威」を体现している。トルロとは何かという疑問は、この物語の中で非常に重要な位置を占めてくるように思われるが、文章ではトルロが何者かということは逐語的にはっきり説明されていないため、トルロの持つ恐ろしさは聞き手の想像に委ねられている。昔話の伝承においては、実際の恐ろしい体験を昇華させ物語化させる過程が見られると言われる。トルロは、より根元的で抽象化された恐怖の存在なのである。一方、絵本の場合、トルロの恐ろしさは、はっきりと手に取るように感じられる。トルロは自然の象徴として具象化され、また同時に表情も描かれることで、感情の動きのある、個性をもった存在として表現されている。その表情からは、どこことなく憎めない要素も伺える。

このように登場人物が描かれたことで、ヤギたちとトルロの闘いの有様が文章のみの物語と絵本では大きな違いとなっていると考えられる。大きいヤギの闘いについて、文章では、「「さあこい！こっちにヤ二ほんのやりがある。これでめだまはでんがくごし。おまけに、おおきないしも二つある。にくもほねもこなごなにふみくだくぞ！」と大きいヤギが言った後、トルロにとびかかり、「つのでめだまをくしごしに、ひづめでにくもほねもこっぱみじんにして、トルロをたにがわへつきおとしました。」と語られる。大きいヤギの視点から、トルロに勝ったことが勢いよく簡潔に語られている。絵本では、大きいヤギがトルロを「こっぱみじん」にした様子が描かれ、トルロは谷川にある岩と同じような形になって砕けている。画家がトルロや闘いをどう受け止めたかが描き出され、闘いのとらえ方として一つの解釈が描かれる。また、大きいヤギとの闘いにおいては、闘いそのものがより動的に描かれている。昔話の観念性を保った生々しさのない絵であるが、自然の脅威の象徴としてのトルロとヤギとの闘いが、視覚的な印象を通して、アクションとして受け止められる。

次に、背景の描写について検討する。文章のみの物語の場合、背景となる場所は「やま」「かわ」「はし」といった一般的な名詞のみで語られる。自然の様子については何も描写されていない。一方、絵本では全体を通して舞台となる荒々しい自然、山の様子が描き出される。それは、北欧の自然を描いたものであり、この昔話が本来語り継がれてきた風土を思わせるものとなっている。そして、その風土、背景と結びつくものとしてトルロが描かれている。

以上のように文章のみの物語と絵本では、登場人物の個性化と闘いの具体的な有り様、そして背景に見られる風土の描かれ方の3点が違っていた。この違いによって、イメージする過程での相違が生じ、それによって物語体験の違いがもたらされると考える。そこで、イメージしたものから物語体験の違いを探るため、インタビュー調査では以下の質問を行った。

①「トルロ」はどのような生き物だと思ったか。

（大きさ、色、形、性格、自分の感想）

②「おおきいやぎ」と「トルロ」の闘いはどんな様子だったか。

（「やぎ」の様子、闘いの展開、自分の感想）

### 3 結果の分析

#### 3-1 絵本という「もの」の存在がもたらす違い

ストーリーテリングと絵本の読み聞かせの間の子どもの聞く態度をビデオ記録から分析した。それぞれの活動時の態度には違いが見られた。

ストーリーテリングにおいては、子どもたちの視線は語り手から動かず、語り手と目が合うとうなずく様子も見られたが、全体に語り手への言語的あるいは身体活動的応答は少なかった。つまり語り手の存在は希薄なようであった。また、子どもたちは、語り手の語る物語の世界に集中し、聞いている自分を意識することも少ないようであった。語り手とともに物語の世界を体験し、それを共有している様子であった。一方、絵本の読み聞かせにおいては、語り手の視線が絵本にあるときは絵を見つめ、語り手の視線が自分たちの方を向くと、語り手と目を合わせ、語り手に向けて感想を言うなどの言語による応答が見られた。例えば、トルロが始めて登場して橋の下に描かれる場面では、男児が「そこ、そこにいるわ。」と読み手の顔を見ながら指さした。語り手とともに、絵本という「もの」を見て、物語と同時にその見る行為も楽しんでいるという様子であった。その間、子どもたちの中には、語り手である大人の存在がはっきりとあり、また聞いている自分の存在も時々よみがえってくるようであった。絵本の読み聞かせにおいては、物語の共有とともに、「もの」としての絵本の共有が行われており、しばしば物語以外のコミュニケーションがとられていた。

ストーリーテリングも、絵本の読み聞かせも、大人が声を通して同じように聞き手である子どもたちと物語を分かち合う体験である。絵本の読み聞かせでは、絵本という「もの」が語り手と聞き手との間に存在

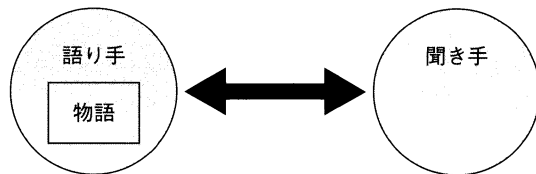


図1 ストーリーテリングにおける語り手と聞き手の関わり

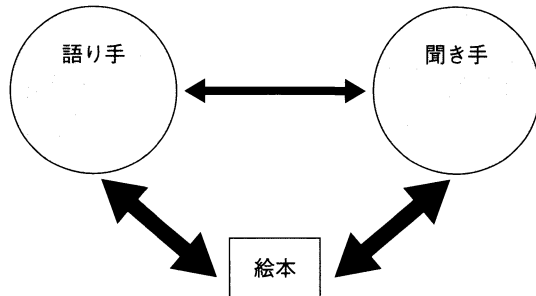


図2 絵本の読み聞かせにおける語り手と聞き手の関わり

し、「もの」を介してのやり取りの楽しみも生まれる。子どもたちと物語を共有するという点においては、ストーリーテリングと質的な違いが存在すると思われる。

ストーリーテリングの場合、図1のように物語は語り手の中にあり、聞き手である子どもたちは、ことばによってそれを体験する。そのとき、語り手と聞き手は直接向かい合うが、共有されているのは物語であり、より直接的な物語体験がなされていると考えられる。一方、絵本の読み聞かせの場合、図2のように、絵本が語り手と聞き手の外に存在しており、物語だけでなく絵本という「もの」を見ることも共有するため、ストーリーテリングで見られるような物語体験に加えて、絵本を介したコミュニケーションの体験が行われている。

### 3-2 絵がもたらすイメージによる違い

#### 3-2-1 物語の背景の受け止め方の違い

ストーリーテリングと絵本の読み聞かせの後に、インタビューを行った。その結果、子どもたちは、それぞれトロルについて異なるイメージを築いており、それによって物語の背景の受け止め方が異なっていたことが分かった。

ストーリーテリングにおいては、トロルの外見の様子を描写するときに、3名とも本文に独特の比喩を用いて言及のある「目」と「鼻」を挙げた。「大きい目やった。」(A1男児)「棒みたいに長い鼻してた。」(A3女児)と目と鼻の形状を説明した。また、トロルの存在を、「トロルはな、大きくて黒くて、そんでオオカミみたいやったわ。」(A1男児)「クマみたいなかな

と思った。」「毛がもじゃもじゃしてたで。」(A2女児)と言い、ヤギを「喰うもの」としてトロルを恐ろしい存在と受け止めていることが伺えた。またもう1名(A3女児)は「あのね、あのね、鬼みたい。」と言い、トロルが象徴する脅威の存在を、自分の知っている空想上の存在と重ね合わせて考えていることが伺えた。

一方、絵本の読み聞かせでは、トロルの外見の様子の描写に、3名とも「口」を挙げ、「きば出てるねんで。」(B1男児)「がばーって口大きいねん。」(B2男児)と説明した。「目」を挙げたものは1名(B3女児「白い大きい目してる。」)、「鼻」を挙げたものはいなかった。ことばによる目や鼻の描写はそれほど印象に残らず、大きく印象的に描かれた歯や口と、トロルの存在を象徴する「喰う」イメージから、口の様子が最も記憶に残ったのであろう。また、トロルを、「岩の化け物」(B1男児)「岩の変な人」(B3女児)「土の怪獣」(B2男児)と表現し、背景の山や川の絵をもとに、岩や土と近い存在と受け止めていた。画家の描いた絵から、トロルを厳しい自然とつながるものと受け止めており、トロルの存在から『三びきのやぎのがらがらどん』が語られてきた北欧の風土にもふれていることが伺えた。

ストーリーテリングにおいては、トロルがヤギを食べようとしている物語の体験を踏まえ、自分の知識の中からヤギを食べるものとして「オオカミ」や「クマ」を導き出したものと考えられる。トロルは「喰うもの」として受け止められ、それに基づいて物語体験を進めていっている。また、「鬼」と捉えているのも、抽象化された脅威の存在を、自らが知っている想像上のものとつなぎ合わせた結果であろう。想像上の生き物であり、かつまた自分たちを食うような恐怖の存在としては、トロルも鬼も非常に近い存在であるといえよう。ストーリーテリングで始めてトロルと出会った子どもたちは、トロルの持つ本質的な存在理由を感じ取り、そのイメージを自らの知っている範囲の中から作り出して、物語の体験を進めていった。

しかし、3人とも、ストーリーテリングを通して、北欧の魔物であるトロルと出会い、その様子を自分の生活から遠く離れた地域に伝えられてきた物語の登場人物として受け止めることはなかった。トロルは、鬼とは違い、自然の厳しさを象徴するものと考えられている。それは、画家の描き出した、岩に非常に近い存在としてのトロルに出会って始めて得られるのではないだろうか。絵本の読み聞かせでは、3人とも、自然

と結びつくトロールを想像し、トロールや背景の絵から、自分たちとは異なる自然の様子や北欧の風土にも目をとめていた。

昔話によって得られる根元的な物語体験はストーリーテリングを通して体験されていたが、絵本の読み聞かせによって画家の感受性を得て始めて、その昔話が語り継がれてきた背景や風土まで受け止められるようになったと考えられる。絵本の読み聞かせにおいては、画家の物語の解釈が絵によって表現されており、それに基づいて、子どもは物語の体験を進めて行っている。

### 3-2-2 絵の受け止め方がもたらす違い

画家の物語解釈が物語体験に及ぼす影響は、ストーリーテリングと絵本の読み聞かせにおける子どもたちのトロールを怖がる様子の違いにも見られた。

絵本の読み聞かせにおいては、トロールが橋の下から腕を伸ばしている第7画面で、顔を手で覆う女児や、目を背ける女児がいた。その頁をめくってすぐにそのような反応を示したことから、物語の展開によって怖くなったのではなく、絵に怖さを感じたのだと考えられる。ストーリーテリングの場合は、同じ場面で、怖がる様子は全く見られなかった。

これはことばによって作り出されるイメージの持つ恐ろしさと、視覚的な刺激である絵によってもたらされるイメージの持つ怖さが、大きく異なっていることを示している。確かに、トロールは、子どもたちが心を沿わせてゆく主人公であるヤギたちを食べようとする恐ろしい存在である。しかし、ストーリーテリングの場合、ことばをもとに自らが作り出すイメージであるため、自分を越える脅威の存在を自分が受け止められる範囲でとらえることができた。絵本の読み聞かせの場合は、画家が解釈し描き出した、自らでは想像し得ない存在としてのトロールがおり、脅威の存在は自分では受け止めかねるものとなったようである。

ことばは、それを受ける子どものなかで、自由にイメージされる。ことばを基にするイメージは子ども一人一人で大きく異なるが、その子どもが求めているような想像が行われることはない。一方、絵のもたらす視覚的な印象は非常に強く、子どもでは想像できないような存在が具体的な形を伴って表される。この物語の主題はトロールとの闘いに勝つことにあると考えられるが、そのトロールをどのような脅威の存在ととらえるかによって、物語の体験の質は大きく異なってくる。絵本の読み聞かせ時に目を背けた女児は「トロール、めっちゃ怖かった。あんなやつつけるがらがら

どんやって、すごい怖いわ。」と後で担任教諭に告げた。画家の解釈による絵によって、脅威の存在が自ら打ち勝つことのできないような怖いものとして受け止められることも起こると考えられる。絵本の読み聞かせにおける物語体験は、画家の解釈の上に行われている。自分では主題を感じ取りかねる体験となることもあるが、視覚による刺激は、子どもの視野を広げ、自分では想像し得ない新たな豊かな体験ができる可能性も持っている。

### 3-2-3 ことばの体験の違い

また、ことばのみによって物語が語られるストーリーテリングと絵による刺激のある絵本の読み聞かせにおいては、子どもたちのことばへの注意、関心のあり方が異なっていた。

どちらの活動時においても、橋の鳴る音のような擬音語の場合に反応した様子はよく似ていた。ストーリーテリングの場合、音に合わせて体を揺すってはいたが、表情は真剣で、自分が体を揺すっていることに気づいていないようであった。ストーリーテリングにおいては、その音によって、ヤギたちの様子や大きさも想像しなければならないため、気を抜くことなく、一つ一つの音を必死で聞いていたと考えられる。

一方、絵本の読み聞かせの場合、ヤギたちが橋を渡る様子は絵で見られるため、擬音語をヤギの大きさと密接に結びつける必要はない。橋の鳴る音を効果音として、音の響きそのものを面白がっている様子が見られた。例えば「かたことかたこと」という音の繰り返しに、読み手を見ながらくすくすく笑う男児がいた。自ら想像していかなければならない部分がストーリーテリングほど展開と結びついてはいないため、より意識的に音を楽しみ、それを読み手と共有しようとしたようであった。

ことばへの注意の仕方の違いは、トロールとの闘いについてのインタビューの答えからも明らかであった。

ストーリーテリングでは、3名とも闘いの場面での大きいヤギの角を「まっすぐ」で「とんがってる」と説明し、それで突き刺してトロールを倒すことを描写した。A1男児は「大きいな、まっすぐな角でな、突き刺してん。」「先、とがってる角やで。」と説明した。またA2女児は「ふんづけた。」と言い、本文の比喩のうち理解できたものから闘いをイメージしたことが伺えた。A1男児は「大きいがらがらどんはな、めっちゃ大きいで。トロールよりずっと大きいねんで。最初はトロールも同じくらいの大きさやったけど、トロール、ずっと小さかったわ。」と、大きいヤギと比べたトロール

ルの大きさが自分の中で変化していった様子を説明し、物語の展開にあわせてイメージを変化させていった様子であった。

絵本の読み聞かせでは、3名とも大きいヤギの角は「ぐるぐる」巻いていると言い、それで突き刺すというイメージは持たなかったようであった。B2男児は大きいヤギがトロルを「ばーってふりまわしてとばした。」と言い、その後テレビで見た怪獣との闘いを細かく説明した。絵の様子をもとに映像で見られるヒーローと怪獣との闘いをイメージしていたことが伺えた。B3女児も「まわりにぐるんぐるん、とんでたで。」と言い、身振り手振りも交えて、闘いの様子を説明した。

ことばによって闘いの状況を捉えていく必要があったストーリーテリングにおいては、自分の理解できる単語を手がかりに、自分のできる範囲でイメージをしていく様子が見受けられた。絵本の読み聞かせにおいては、両者の闘いは、非常に映像的に受け止められ、音や動きで表現された。絵という静止したものから、いきいきした闘いの動きをイメージし、その動きを感じていたことが伺えた。

ことばそのものの受け止め方の違いは、ことばを基にする物語の体験としての違いを生み出していくと思われる。ストーリーテリングでは、ことばからイメージを築き上げていく体験がなされており、絵本の読み聞かせでは、画家が描いたイメージをことばによって動かしていく体験がなされていたようであった。

### 3-3 物語を体験する視点の違い

ことばからイメージを築き上げていく体験と、画家が描いたイメージをことばによって動かしていく体験は、ストーリーテリングと絵本の読み聞かせにおける子どもの視点の違いも生み出した。ストーリーテリングにおいても、絵本の読み聞かせにおいても、子どもたちは始め小さいヤギに自分を重ね合わせ、その視点を取っているようであった。より自分に近い存在に、自分を重ね合わせて、その物語を体験していく様子が見られた。しかし、大きいヤギが登場すると、ストーリーテリングでは、終始ヤギたち側の視点から物語を体験していたようであるが、絵本の読み聞かせにおいては、第三者的な客観的な視点を取る様子が見られた。

ストーリーテリングにおいては、主人公であるヤギたちに順々に自分を重ね合わせ、その視点からトロルを受け止め、自分がまさにトロルと闘っている様子で

あった。活動時には、小さいヤギたちが橋にさしかかるたびに身をすくめ、大きいヤギがトロルに打ち勝つとほっとした様子を見せていた。インタビューではA1男児が「目の前にトロルがおって、それを突き刺してんで。」と描写するなど、ヤギと重なる視点からの説明が見られた。

一方、絵本の読み聞かせでは、絵本が「もの」として存在していることに加えて、画家が描き出した絵が見えているため、登場人物に重なり合いながらも、時に、第三者的な視点を持っていることがあった。例えば、二番目のヤギが無事に山に逃れてほっとできる画面で「このヤギも食べたらいいのに。」とヤギたちからは離れた視点を取った感想を述べる男児がいた。またインタビューでも、大きいヤギとトロルの闘いを、テレビにおけるヒーローと怪獣の闘いと同じように描写し、ヤギたちとは異なる視点からの説明がなされた。

また、3-1でも述べたように、ストーリーテリングにおいては、子どもが聞き手である自分を意識することはほとんどなかったが、絵本の読み聞かせにおいては、語り手と目が合うことで、聞き手として存在している自分を意識化する様子が見られた。絵本の読み聞かせでは、登場人物以外の視点だけでなく、聞いている自分の視点をも持つことがあり、自分と登場人物を重ね合わせることがストーリーテリングほど密接なものではない様子であった。

この隔たりは、心情の把握の仕方において大きな違いを生み出しているように思われる。この『三びきのやぎのがらがらどん』には、途中、地の文において感情についての描写はない。会話によって心情が語られるところもあるが、大部分は行動の描写であり、登場人物の心情は、行動を通してしか推測できない。しかし、登場人物に重なり合うことでその行動を体験し、それによって登場人物の心情も体験していくことができる。つまり、ストーリーテリングによって、主人公と重なり合って行動していくと、その心理的な変化をも、意識しないまま体験し、想像していくのである。絵本の読み聞かせにおいても同様の体験はなされるが、表情からその心の動きを知ることと起こる。それは、物語を第三者的な視点から体験することであり、他者の感情を見えているものから知ることとなり、感情の理解の仕方としては異なっているのである。

#### 4 考 察

絵本の読み聞かせと比較して明らかになった、ストーリーテリングにおける物語体験の特徴をまとめる。

まず、ストーリーテリングでは、物語を表現した「もの」の存在がないため、子どもは語り手にそのまま向き合い、語り手が語った物語の世界を自ら築いてゆくことになる。絵本の読み聞かせでは、子どもは読み手とともに、物語が表現された絵本という「もの」と向き合い、それを分かち合うという物語体験を行っている。一方、ストーリーテリングでは、子どもは語り手と直接向き合い、語り手の語る物語だけに集中するという物語体験を行う。物語は「もの」として存在せず、自らがイメージを築くことで始めて物語は成立し、体験される。また、絵本の読み聞かせでは絵本という「もの」が存在するため、絵本を介してのやりとりも行われ、「もの」と対峙することによって自分と読み手の存在も意識化される。一方、ストーリーテリングのようにイメージを築きながら物語体験を進めていく過程では、物語が特に意識されるようになっていき、自分の存在も語り手の存在も希薄になってゆくようであった。ストーリーテリングでは、子どもが語り手に直接向き合い、物語を自ら築いて、その体験を進めていくという、物語中心の物語体験がなされているのではないだろうか。

また、ストーリーテリングでは、物語は語り手の内にあり、語り手以外による物語の解釈は明示されない。絵本のように画家が自らの感受性をもって描いた物語の解釈が示されると、それを手がかりに自らの内になかった新たな体験がなされる。一方、ストーリーテリングでは、子どもは語り手の語ることばを聞き、それに基づいて自らの内にあるものから自分でイメージを築いて物語を体験していくことになる。それは子ども自らの経験と結びつく体験であり、それまでの経験によって一人一人の物語体験は大きく異なったものとなる。個々の子どもは自らの内にあるものと結びついた物語体験を行い、物語の主題も自らが受け止められる範囲で感じ取ることになる。ストーリーテリングにおいては、自分の中にある経験をもとに、物語を通してイメージを発展させていくことで新たな体験を得ていくことがなされていると思われる。

さらに、ストーリーテリングでは、自分が築きあげた主人公に自分を重ね合わせて、その行動と感情を体験していくことがなされていた。ストーリーテリング

では、上で述べたように、自分の存在そのものも希薄になっていくことが考えられ、物語の中での主人公の体験をそのまま自らの体験とすることができる。だからこそ、行動を追っていくことで、感情をも想像でき、それを体験することができるのであろう。絵に登場人物や背景が描かれている場合、完全に自分を重ね合わせることは難しい場合もある。ストーリーテリングにおいては、このような密接に主人公と重なり合うことがなされる。これが、ストーリーテリングにおける物語体験の大きな特徴の一つであると思われる。

ストーリーテリングは語り手を通した物語の体験であり、語り手の解釈が含まれる。演技は行われませんが、語り手の声の調子や表情などの変化が、物語の印象を変え、登場人物の心情の受け止め方も変えるだろう。子どもと語り手との人間関係によって、その物語体験も異なってくるのではないだろうか。今後、語り手と子どもの人間関係による差異についても検討が必要である。また、耳から聞く文学の体験がどのような意義を持っているかを探るためには、昔話以外の物語での検討や他の年齢での検討も加えて、物語体験の実際をさらに明らかにしていくことが必要であると考え

#### 注

- 1) 松岡享子はストーリーテリングを「お話」と表現するが、「お話は、話そのものに文学的な価値があることを前提と」しているとし、「文学的な価値」とは「わたしたちのこころをたのしませ、人間についてのわたしたちの理解を助けてくれるもの」としている。(『たのしいお話 お話を子どもに』日本エディタースクール出版部 1994)

間崎ルリ子は「人間の心がつくり出す文学に対して心を開き、古今東西のあらゆる文学に巾広く親しむ」ことが題材の選択において重要であると述べている。(『ストーリーテリング—現代におけるおはなし—』児童図書館研究会 1987)

- 2) 例えば、渡辺茂男はマーシャ・ブラウンの昔話絵本について「どれを見ても一冊として同じテクニックを使っていない、その国の風土性を生かせるような描き方」を探っていると評している。(『絵本の与え方』日本エディタースクール出版部 1978)

瀬田貞二は、マーシャ・ブラウンの「特質的な想像力が生き生きと流れるには、やはりファンタジーを待たなければならなかった」とし、昔話やアンデルセン童話の絵本化について「一作ごとに新しい様式をさぐって前進する」としている。(『絵本作家の成長をたどる〈マーシャ・ブラウン〉』『絵本論』福音館書店 1985)

他にも「民話を多く取り上げ、現地へ行ってスケッ



- チし、題材に合わせて一作ごとに画法や画材を変えるという、丹念な絵本づくりをしている」とされている。(鳥越信編『絵本の歴史をつくった20人』創元社 1993)
- 3) 佐藤俊彦訳「ふとりたくて丘にゆく三びきの牡ヤギ・ブルーセ」(『太陽の東 月の西』岩波少年文庫 1958)
- 大塚勇三訳「三びきのやぎのどんがらん」(『北欧の昔話』福音館書店 2006)
- 4) スミスは、文学の評価を行うための分析の観点として、「構成」「考え」「ことば」の三点を挙げている。再話された昔話を検討する場合、作家のつくりあげた構成よりも昔話に見られる構造を検討する必要があると考えられる。またスミスは、「考え」とは「テーマ」のことであるとしており、昔話においては主題を検討することとした。(『児童文学論』石井桃子他訳 岩波書店 1967)
- 5) リューティ、マックス『昔話の本質と解釈』野村弦訳 福音館書店 1996
- 6) スミスは、この『三びきのやぎのがらがらどん』のテキストを分析し、この物語の形を「すべてのよい作品に求める、力と客観性と抑制を具えた形である」としている。(『児童文学論』石井桃子他訳 岩波書店 1967)
- 7) 瀬田貞二は、幼い子どもが楽しむ文学の構造として「行きて帰りし」物語をあげ、往還構造を見いだしている。(『幼い子の文学』中公新書 1980)
- 8) 渡辺茂男『絵本の与え方』日本エディタースクール出版部 1978

- 9) ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』波多野完治、乾侑美子訳 評論社 1978
- 10) 瀬田貞二『絵本論』福音館書店 1985
- 11) 松岡享子『昔話を絵本にすること』東京子ども図書館 1981
- 12) 渡辺茂男『絵本の与え方』日本エディタースクール出版部 1978

#### 参考文献

- スミス、L・H『児童文学論』石井桃子他訳 岩波書店 1967
- 瀬田貞二『絵本論』福音館書店 1985
- ソーヤー、ルース『ストーリーテラーへの道』池田綾子他訳 日本図書館協会 1973
- 間崎ルリ子『ストーリーテリング』児童図書館研究会 1987
- 松岡享子『たのしいお話 お話を子どもに』日本エディタースクール出版部 1994
- 秋田喜代美『読書の発達過程－読書に関わる認知的要因・社会的要因の心理学的検討－』風間書房 1997
- 内田伸子『発達心理学』岩波書店 1999
- 日本図書館協会『子どもの豊かさを求めて3』日本図書館協会 1995
- サンダース、バリー『本が死ぬところ暴力が生まれる』杉本卓訳 新耀社 1998
- 鳥越信編『絵本の歴史をつくった20人』創元社 1993
- 渡辺茂男『絵本の与え方』日本エディタースクール出版部 1978
- ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』波多野完治、乾侑美子訳 評論社 1978